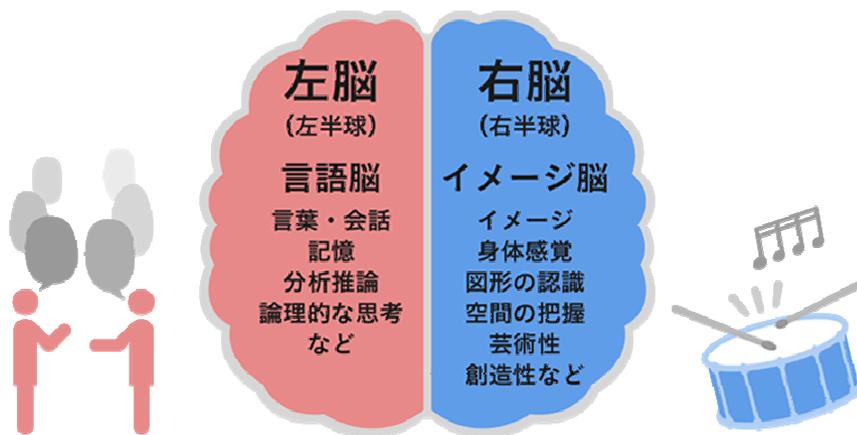


右脳と左脳

人間の脳は、中心線から左右に分けてみると、右半分ー左半分となる。(自分を中心に) 右半分を「右脳」、左半分を「左脳」とよぶ。

よく言われるように、この「右脳」と「左脳」は、人間の行動において、働き方が違うようだ。すなわち感覚的な部分は右脳が働き、論理的・数学的な部分は左脳が働くらしい。

ということは、赤ん坊は、まず「右脳」が活発に動き出し、4～5歳になって、「左脳」が成長してくる。



引用図

幼稚園に入って、絵を描くときに幼児は、黙っていると左手で描き始めるのではないだろうか。(脳と手の関係は逆で、右手は左脳が支配)

そして、多分において保育さんは、右手で描くようにさせる。

文字は、日本語にしろ英語であろうと右手で書くように造られているから。(本当かな)

社会のしきたりや、理屈、数字を覚えるようになると、子供たちの「左脳」が発達するようになる。

小学生になって、成績優秀と言われる子供たちは、早くに「左脳」を発達させることが出来た子供たちだ。

よく、社会適合困難者(知恵遅れ?)の子供たちが、大人がびっくりするような写実的な絵を描くことがある。これは、「左脳」よりも「右脳」が大きく発達したせいと判断される。

「こども囲碁教室」では、子供たちは打ち方がすごく早い。

まるで、考えないで打っているようだ。おそらく、この時に子供たちは、「右脳」の働きで判断しているのだろう。

囲碁というのは、ある意味「デジタル論理」である。終局時に「地(石で囲ったところ)」が目でも多い方が勝ちとなる。

ゆえに常に全体を見て、地の多くなるような打ち方をしないと、最終的に勝てない。

初級者の子供が囲碁の対局に勝てないのは、「右脳」的打ち方をするからで、入門の大人たちが上達し難いのは、「左脳」的思考によるものではないかと考える。

この「左脳」「右脳」のバランスの良い打ち方が出来ると、囲碁の対局でもかなり勝率が上がるのではないかと考えている。